

医学部ウォーカー

1面：弘前大学COI-NEXT Well-beingイノベーションフォーラム2024開催
2面：医学研究科長・医学部長挨拶
3面：第178回日本病理学会東北支部学術集会学生奨励賞受賞
4面：第55回日本臨床医学会2024年度研究発表部門において、最優秀賞を受賞
5面：海外日本人研究員 Young Investigator Awardを受賞
6面：特別賞を受賞
7面：特別賞を受賞
8面：特別賞を受賞
9面：特別賞を受賞
10面：特別賞を受賞
11面：特別賞を受賞
12面：特別賞を受賞
13面：特別賞を受賞
14面：特別賞を受賞



福田学長 宮下知事 櫻田市長 井上局長 澤谷PO 基調講演(村下)
小宮山顧問 松尾政策参与 内田社長 北瀬CSVP 中井執行役員 田中副市長
玉田先生 内野先生 井元先生 的場先生 二宮先生 瀨川副PL
桂木SIL 五十嵐先生 成本先生 宮田先生 廣田副PL 曾我副学長

「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションフォーラム2024」開催
学長特別補佐 健康未来イノベーション研究機構 機構長・教授 村下公一

令和六年九月二十日(金)、弘前大学は、青森県、弘前市とともに、シンポジウム「弘前大学 COI-NEXT Well-beingイノベーションフォーラム2024」を、橋講堂(東京都千代田区)で開催しました。
まずは本フォーラムの開催にご尽力をいただきました学内外の先生方、参画機関の皆様、そしてスタッフとして運営にご協力をいただいた皆様にご挨拶を申し上げます。おかげさまで

COI-NEXTの拠点として東京での開催は二回目となり、現地会場・オンラインを合わせ、国内外から約二千五百名と多くの方にご参加をいただきました。
弘前 COI-NEXT 拠点は、健康を基軸とした「経済発展モデル」と「全世代アプローチ」で Well-being な地域共創社会の実現をめざしています。これまでのCOI活動成果を基盤に、健康(QOL)の本質的課題解決へ向けてさらに力強く挑

戦し、STI for SDGs の理念のもと、地域から世界の健康づくり(SDGs)への貢献をめざします。本フォーラムでは、新健康未来イノベーション戦略の実現に向け、未来の地域社会モデル、ヘルスケア産業創出等について第一線の産学官金関係者が一大集結し、熱い議論が展開されました。
開会にあたり、学長福田眞作先生、青森県知事宮下宗一郎氏、弘前市長

石橋研究科長 パネルディスカッションの様子 会場の様子

COI-NEXT 共創の場形成推進会議 顧問/株式会社三菱総合研究所 理事 長/浦田 雅之
「健康産業イニシアティブ」を立ち上げよう プラチナ社会を創る」と題して、健康産業イニシアティブ、次世代への構想にかかる講演をいただきました。続いて、内閣官房政策参与(前) 科学技術イノベーション推進事務局

「データ連携 最前線」では、京都府立医科大学副学長/大学院医学研究科の場教授、九州大学大学院医学研究院 二宮教授がそれぞれの大学で取得されたデータと岩木プロジェクト健康データの連携により得られた最新の成果を、ご紹介されました。
「経済循環モデル最前線」(PFS/SIB)では、副プロジェクトリーダー/DeS Cヘルスケア株式会社代表取締役社長 瀨川氏 および花王株式会社研究開発部門 門田 浩二氏、桂木 浩二氏、また東京大学大学院薬学系研究科 五十嵐 雅之先生、石橋先生からご挨拶をいただき、当シンポジウムは大きな拍手に包まれ成功裏に終了しました。
今回の Well-being イノベーションフォーラムは、COI-NEXTの拠点採択後二回目の東京開催の大きなシンポジウムとして実施をさせていただきます。無事に開催することができ、学内外の先生方、参画機関の皆様はじめご関係皆様からいただきましたご指導、ご支援にこの場をお借りし改めて感謝申し上げます。
また、誠にありがとうございます。弘前大学 COI-NEXT 拠点は今後も関係者一同、Well-being 地域社会共創の実現に向けて、躍進して参ります。先生方、ご関係皆様には引き続きのご指導を賜りますようお願い申し上げます。

櫻田宏氏からご挨拶をいただき、来賓として文部科学省 科学技術・学術政策局長 井上諭一氏、科学技術振興機構(JST) COI-NEXT 共創分野・地域共創分野 第1領域 プログラム オフィサー 澤谷由里子氏よりお言葉をいただきました。
基調講演では、私(村下)から「革新的 Well-being 共創社会の実現」と題して、これまで中野先生が率いてこられた弘前大学 COI の成果に基づいた COI-NEXT 戦略や研究内容、目指す社会について講演させていただきました。



QOL 健診の様子 ポスター展示

Well-being 2024.9.20 FRI 13:00-17:15
「弘前 COI-NEXT Well-being イノベーションフォーラム2024」開催
Well-being 健康未来イノベーション研究機構
プログラム
13:00-13:15 開会式
13:15-13:30 基調講演
13:30-13:45 休憩
13:45-14:00 基調講演
14:00-14:15 休憩
14:15-14:30 基調講演
14:30-14:45 休憩
14:45-15:00 基調講演
15:00-15:15 休憩
15:15-15:30 基調講演
15:30-15:45 休憩
15:45-16:00 基調講演
16:00-16:15 休憩
16:15-16:30 基調講演
16:30-16:45 休憩
16:45-17:00 基調講演
17:00-17:15 閉会式

長崎 研究科 医学部 医学

国立大学医学部長会議に出席して

医学研究科長 石橋 恭之



さる十月二十五日に第九回国立大学医学部長会議が千葉大学を主幹校として開催されました。教育制度・カリキュラム、地域医療・医療人育成、研究推進・大学院教育、そして研究倫理に関する各種委員会報告などに加え、各大学から提案された議題について協議

が行われました。その内容は、①研究力強化、大学院学位等の情報共有、②医療系大学間共用試験実施評価機構（CATO）の年会費値上げ、③授業料の変更、④グローバル化推進時代における海外学生の実習受け入れ、⑤令和七年度医学部臨時定員の配分、⑥共用試験の実施に関する要望、などが主なものです。予算や人員問題など世知辛い議題が多くありましたが、どれも当大学にとっても大きな課題であり、大変参考になりました。

前大学の臨時定員増を「可」とする回答が文部科学省から十月二十九日付けであったところですが、この臨時定員配分は医師不足の青森県にとっては非常に重要です。ご存じのように地域医師確保の観点から、全国的に医学部入学者が臨時定員追加により増えています。その数は、既定の恒久定員約八千四百名に対し、現在は約九千四百名となつています。この臨時定員増の効果もあり、

青森県内の臨床研修病院で研修を開始する医師数も八十名を超えるようになりました。しかしこの医師需給は（図参照）、労働時間を六十時間に制限する需要ケース2の仮定において、令和五年の入学者が医師となる二〇二九年頃には需要と供給が均衡すると推計されております。もちろんこれは全国的なものであり、青森県の臨時定員配分が当面減らされることはないとのことですが、一般枠で入学した医学部生が地域に残る比率は青森県が最低レベルとなつております。つまり仮に臨時定員が無くなる

と、県内で臨床研修を開始する医師数の減少に直結します。本年一月に、弘前大学は青森県立中央病院及び青森県と地域医療維持確保に向けた医師派遣等に関する三者協定を締結しました。県内外から研修医が集まるような魅力的な臨床研修、キャリアアップを支援するプログラムを構築していかねばなりません。この他、卒前教育においても医療系大学間共用試験であるCBT、Pre-COSCAが二〇二三年から公的化されました。医学部もカリキュラムの変更等を含め、進めなければならぬ問題が山積しております。皆様方のご協力を得ながら一つ一つ改革していきたいと思

と伺っております。引き続き、若い研究者のご指導をお願い申し上げます」と本学への多大な貢献に感謝する旨の挨拶がありました。続いて、研究科長である私から「この度は弘前大学特別招聘教授第一号おめでとうございます。これまで各科との交流の他に、基礎研究等での交流がございました。本学はこれからPREPARKSの採択に向けて、武部先生はキーマンになると思っております。今後も我々と末永く交流していただき、弘前大学と共に発展させていけたらと思っております」と挨拶いたしました（ちなみに武部先生、婦人科学講座 横山教授、私は同期でした）。

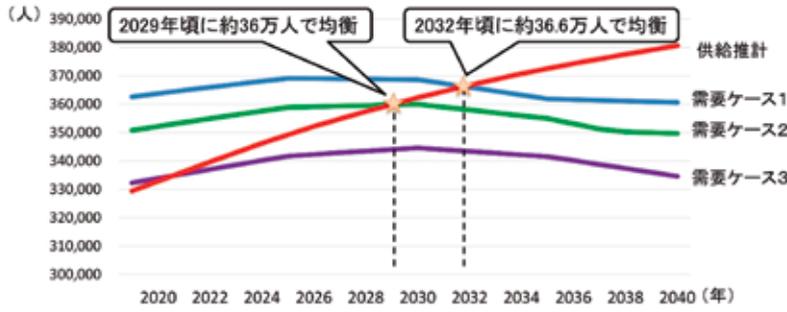
武部先生からは「この度は、このような名誉ある称号をいただきまして、心から感謝申し上げます。本学を卒業して以来、アメリカに渡り三十三年になりました。NIHでは村井先生が第一号で研究所へお越しください、コロナの渦中にも負けず素晴らしい研究をされており、全力でお支えさせていただきます。」

せていただきました。現在はオクラホマ州立大学へ移りましたが、引き続き弘前と研究・教育の面でより一挨拶がありました。

令和2年度 医師の需給推計について(案)

医師需給は、労働時間を週60時間程度に制限する等の仮定をおく「需要ケース2」において、2023年(令和5年)の医学部入学者が医師となると想定される2029年(令和11年)頃に均衡すると推計される。

- ・供給推計 今後の医学部定員を令和2年度の9,330人として推計。
※ 性年齢階級別異なる勤務時間を考慮するため、全体の平均勤務時間と性年齢階級別の勤務時間の比を仕事率とし、仕事量換算した。
- ・需要推計 労働時間、業務の効率化、受療率等、一定の幅を持って推計を行った。
・ケース1(労働時間を週55時間に制限等) 年間720時間の時間外・休日労働に相当
・ケース2(労働時間を週60時間に制限等) 年間960時間の時間外・休日労働に相当
・ケース3(労働時間を週78.75時間に制限等) 年間1860時間の時間外・休日労働に相当



第35回医師需給分科会資料より <https://www.mhlw.go.jp/content/1080000000665176.pdf>

「弘前大学特別招聘教授」称号付与授与式を挙行

医学研究科長 石橋 恭之



弘前大学大学院医学研究科では、二〇二四(令和六)年八月十四日(水)に医学研究科基礎校舎一階大会議室において、本学第一号となる「弘前大学特別招聘教授」称号付与授与式を執り行いました。「弘前大学特別招聘教授」は、本学の教育研究の推進、質の向上に寄与する者を対象に授与される称号として、令和五年五月に設置されました。

今回、弘前大学特別招聘教授第一号となった武部直子先生(推薦当時所属・職名Head, Translational Science, Associate Chief, Development Therapeutics

Clinic, Early Clinical Trials Development Program, Division of Cancer Treatment and Diagnosis (DCTD), NCI, NIH) は、本学医学部

医学科・大学院医学研究科の卒業生であり、推薦時は、アメリカ国立衛生研究所(NIH)に所属し、著名な研究業績を上げ、NIHのTranslational Scienceの責任者を務められておりました。また、NIHにおいて本学研究者の受け入れにご尽力されるとともに、本学との国際共同研究の推進及び質の向上に寄与されており

授与式では福田学長から称号付与通知が手渡され、「これまでも研究者の受け入れ等で大変お世話になっており心より感謝申し上げます。今後、弘前大学医学部と異動されたオクラホマ州立大学と協定を締結する

受賞報告 第98回日本病理学会東北支部学術集会

学生奨励賞を受賞

病理生命科学講座 医学科五年 倉本 莉名

この度、二〇二四年七月十三・十四日に福島市で開催された第九十八回日本病理学会東北支部学術集会にて学生奨励賞を受賞いたしましたので報告致します。

今回は「左環指に爪甲黒色線条を呈した1例」という演題で、悪性黒色腫の自然退縮と扁平上皮病変の併存という、大変貴重な症例を報告しました。皮膚原発の悪性黒色腫では一〇〜三

五%の症例で自然退縮が見られたとの報告があります。しかしながら、本邦で最多の病型である末端黒子型は自然退縮を起こす頻度が最も低く、一・八%〜三・三%であったと報告されています。悪性黒色腫の自然退縮を示す組織学的特徴もいくつか報告されていますが、

(次ページへ続く)



(前ページより)
 炎症でも見られるものであり、臨床経過を含めた総合的な判断が求められます。今回、扁平上皮病変については、異型に乏しく、腫瘍か否かは判断とせませんでした。実際に爪下悪性黒色腫では一四%で扁平上皮癌の合併が見られたとの報告があります。同報告で爪下悪性黒色腫に合併した爪下扁平上皮癌はいずれも高分化型であり、腫瘍が反応性病変か判断が困難な症例も含まれていました。本症例では、反応性病変と判断しました。

発表後の懇親会では他大学の先生方と交流を深め、将来のキャリアプランなどについて意見を交わすことが

できました。三月からクリニカルクラッシュが始まり卒業後の進路について具体的に考えることが増えた中で、実際に病理医として働く先生方から自らの経験に基づいた貴重なアドバイスを頂き、クリニカル・クラッシュや初期研修で学ぶべき目標を定めることができました。

私は三年次の研究室研修から病理生命科学講座で勉強させて



いただいたおかげで、先生方をはじめスタッフの皆さんはとも優しく、学会発表・参加に加え病理解剖

YIA研究発表部門において最優秀賞を受賞

附属病院／循環器内科、腎臓内科 医員 金野 佑基

受賞報告 第178回日本循環器学会東北地方会

この度、第百七十八回日本循環器学会東北地方会にて Young Investigator's Award 研究発表部門にて最優秀賞を受賞いたしましたので、ご報告申し上げます。現在、循環器腎臓内科

学講座にて皮下植込み型除細動器 (SICD) の研究を行っており、今回、「経静脈植込み型除細動器と皮下植込み型除細動器 (SICD) の長期有用性の比較検討：傾向スコアマッチ解析」という演題で発表を行いました。植込み型除細動器 (ICD) は致死性心室性不整脈による心臓突然死を回避する最も有効かつ確立された治療法です。本邦では二〇一六年二月からはシステム全体が血管外に留置

され心臓に触れずに突然死を回避する、皮下植込み型除細動器 (SICD) が保険償還され、急速に普及拡大が進んでいます。SICDの有効性及び安全性が明らかになってきましたが、日本人患者における長期有用性を検討した研究はこれまでありませんでした。また、SICDは従来の経静脈植込み型除細動器 (TV-ICD) と比較して、T波のオーバーステンジングに由来する不適切ショックの割合が高いことが知られており、一つの課題となっていました。この課題を克服するの

が SMART Pass filter、GHZ未満の低い周波数の信号の振幅を減少させることで SICD の不適切動作を回避するシステムです。本研究では当施設にて SICD および TV-ICD 植込みが行われた連続症例を対象に傾向スコアマッチ解析を用いて患者背景を調整した上で、SMART Pass filter が設定された SICD と TV-ICD の比較検討を行いました。ICD 適切ショックについて

は両群で有意差を認めませんでした。また、従来 SICD で多いとされていた不適切動作は、SICD 群全例で SMART Pass filter が設定された本研究では TV-ICD と比較して有意差を認めませんでした。ただし、TV-ICD では適切動作、不適切動作ともに約七割で抗頻拍ベージングの動作により

り、TV-ICD の利点も明らかになりました。一方、今回の検討で SICD の利点として示されたのがリード関連合併症をメインとした合併症発生率の低さです。若年、血管アクセスが困難な患者、創部感染症のリスクの高い患者では SICD の合併症の少なさは大きなメリットとなりうることを明らかにしました。各デバイスの特徴を理解した上で、適切な適応判断を行うことで両者のメリットを享受することができると結論づけました。

今回の受賞を励みに、今後も研究を重ねて参る所存です。本研究のご指導をいただきました循環器腎臓内科科学講座富田泰史教授、佐々木真吾准教授、石田祐司先生ら共同研究者の諸先生方にこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。



この度、二〇二四年六月に弘前市で開催された第百七十八回日本循環器学会東北地方会にて、Young Investigator's Award (YIA) 症例発表部門で「心室頻拍ストームに対する緊急カテーテルアブレーションが奏功した甲状腺中毒症の一例」という演題で発表を行いました。最優秀賞を受賞いたしました。心室頻拍 (VT) は致死性心室性不整脈であり、二十四時間以内に三回以上の電氣的除細動が必要

な状態を「VT ストーム」と呼びます。血行動態の破綻を引き起こす危険な状態であり、緊急対応を要する

の見学など、様々な経験を学生に与えてください。改めまして、温かいご指導に感謝いたします。

YIA 症例発表部門 最優秀賞受賞

心臓病遠隔管理システム開発学講座 助手 日山 芽維

受賞報告 第178回日本循環器学会東北地方会

病態です。今回、甲状腺機能亢進症を合併した薬物治療抵抗性の右室流出路起源 VT ストームの症例に対し、甲状腺クリーゼの増悪リスクを十分に検討した上で、ベイルアウトを目的に、緊急 VT アブレーションを施行しました。通電によって VT を速やかに抑制し、血行動態の破綻を回避することができ、周術期合併症を伴うことなく自宅退院に至りました。治療戦略の検討にあたっては、甲状腺機能亢進症の背景甲状腺疾患や、カテーテルアブレーション部位、造影剤の使用の必要性などを含むリスク

評価を慎重に行い、機械的補助循環によるバックアップを考慮しました。このように、甲状腺クリーゼを含む周術期合併症のリスクを十分に検討した上で施行した緊急 VT アブレーションは、自身にとって大変意義のある経験となりました。これまでの基礎研究により、甲状腺ホルモンが心筋に対して、催不整脈作用として影響する可能性が示唆されていますが、甲状腺機能亢進症に合併する VT に対する緊急 VT アブレーションのエビデンスは依然として不十分です。本症例を通じて、ベイルアウトを目的とした緊急カテーテルアブレーションが、有効な治療選択肢と

なり得る状況が、一定数存在するといことが示唆されましたので、今後の循環器診療とエビデンス構築の一助となればと考え、今回の症例発表に至りました。

今回の YIA は、循環器病学の発展と若手循環器専門医の育成を目的に設けられた賞です。弘前大学循環器学教室として取り組んできた診療の中で、治療選択やその適応判断に悩ましい症例に直面し、患者様から多くのことを学ばせていただきました。これら貴重な経験について発表することができ、自身にとって大変意義深い学会となりました。今後ともチームで協議を重ね、若手不整脈専攻医として最

適な不整脈診療の実現を目指し、日々研鑽を積んで参りたいと考えています。最後に、ご指導いただいた循環器腎臓内科科学講座の富田泰史教授をはじめ、多くの諸先生方に深く感謝申し上げます。



2024年度箱守賞の優秀論文賞を受賞

附属病院／呼吸器内科、感染症科 病院助手 小堀 由璃

受賞報告 第18回東北糖鎖研究会

令和六年十月五、六日に開催された第十八回東北糖鎖研究会において、箱守賞優秀論文賞を受賞しましたので報告いたします。論文名は「TMEM2 suppresses TLR3-mediated IFN-β/ISG56/CXCL10 expression in BEAS-2B bronchial epithelial cells (BEAS-2B 気管支上皮細胞)において TMEM2 は TLR3 を介した IFN-β/ISG56/CXCL10 発現を抑制する」で、この論文は Mol. Biol. Rep. 51:417, 2024. に掲載

されたものです。呼吸器領域においてウイルス感染症の頻度は多く、SARS-CoV-2 やインフルエンザウイルスなどが度々ニュースとなっております。しかしながら、特異的な治療法が確立されているものは少なく、今後の治療法開発のために気管支上皮細胞での抗ウイルス自然免疫応答の解明が必要です。今回の研究では Transmembrane protein 2 (TMEM2) と抗ウイルス自然免疫応答について検討しました。

TMEM2 はヒアルロン酸代謝に関わる 2 型膜貫通型タンパク質であり、心内膜・心筋・骨格筋の形態形成、膀胱癌や乳癌の予後との関連など、様々な機能が報告されています。その中でも、肝細胞癌株で TMEM2 が JAK-STAT シグナル伝達を増強し、B 型肝炎ウイルス感染が抑制されたとする報告に注目し、ウイルス感染機会の多い気管支上皮細胞で検討を行いました。まず、免疫組織化学で正

(次ページへ続く)

(前ページより)
常ヒト組織でのTMEM2の発現状況を確認しました。気管支上皮細胞では細胞質全体に発現が認められた一方、既存報告のあった肝細胞では発現がありませんでした。次に、非癌性気管支上皮細胞株であるBEAS-2B細胞を培養し、二種類のsiRNAでTMEM2をノックダウンした後、Toll-like receptor 3 (TLR3) のリガンドである合成二本鎖RNA (poly IC) を添加して実験しました。poly IC刺激時にTMEM2をノックダウンし

た細胞では抗ウイルス作用を持つinterferon (IFN)- β -CXC motif chemokine ligand 10 (CXCL10) / IFN-stimulated gene (ISG) 56の有意な増加を認め、気管支上皮細胞ではTMEM2が過剰な免疫応答を抑える方向に働いていることが示唆されました。TMEM2はヒアルロン酸代謝との関連が報告されていますが、ヒアルロン酸の分解と合成のどちらに働くかは今も議論されています。その上、TMEM2によるTLR3シグナルの抑制にヒアルロン酸代謝が関与して

いるかを検討しましたが、TMEM2のノックダウンはpoly ICの刺激で培養液中のヒアルロン酸濃度は低下したものの、両者の相加・相乗効果は認めず、TMEM2がTLR3シグナルの抑制効果を示す作用機序については、更なる研究が必要と考えています。最後にありますが、今回の論文作成・受賞講演に当たり御指導・御協力いただきました今泉忠淳先生、大山西先生、田坂定智先生並びに多くの先生方に深く感謝申し上げます。

受賞報告 第55回日本脾臓学会大会

Young Investigator Awardを受賞

附属病院／消化器外科、乳腺外科 病院助手 **山田 貴大**

今回、第五十五回日本脾臓学会大会でYoung Investigator Awardを受賞しました。この賞は、脾臓病診療への応用という観点で将来性が高い若手研究者の研究成果を称えるものです。1等から3等までの三人に与えられますが、2等を受賞することができました。

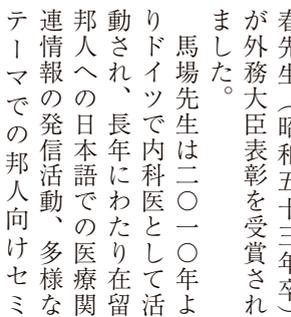
私は消化器外科の大学院生であり、分子病態病理学講座において脾臓癌と糖尿病の関係性に焦点を当てた研究を行っております。今回の受賞発表は「長期糖尿病罹患は癌間質M2マクロファージの硫黄代謝を促進し脾臓の予後を増悪させる」というタイトルです。

長期糖尿病罹患が脾臓の予後に与える影響について硫黄代謝から検討を加えたことが、新しい視点として評価されました。これまで分子病態病理学講座では、長期糖尿病罹患



が脾臓の予後を増悪させることを報告してきましたが、その機序は明らかではありませんでした。脾臓では癌間質がその悪性度の決定に密接に関与しています。そこで脾臓癌間質のみをプロテオーム解析(サンプリング内の全タンパク質を包括的に検出する手法)にかけて治療標的のシグナルを探求しました。

その結果、長期糖尿病合併脾臓癌の癌間質に存在する炎症抑制性M2マクロファージで、硫黄代謝に関連するタンパク質の発現が亢進していることが明らかとなりました。M2マクロファージは脾臓の予後を増悪させる免疫細胞であるため、長期糖尿病はM2マクロファージの硫黄代謝を亢進させ、その細胞機能を活性化させている可



能性が示唆されました。以上の結果は、M2マクロファージの硫黄代謝を標的とする新規治療法の開発に繋がる可能性があり、果が足りないため、今後さらに研究を進めて参ります。ご指導いただいた消化器外科科学講座の袴田教授、分子病態病理学講座の水上教授、ならびに両講座の先生方、実験助手の方々、またプロテオーム解析を行っていただいた分子生体防御学講座の多田羅先生には厚く御礼を申し上げます。どうもありがとうございます。

本年八月一日、医学部医学科を卒業されたJAMS NET(在留邦人のための健康支援ネットワーク)・ドイツの代表である馬場恒春先生(昭和五十三年卒)が外務大臣表彰を受賞されました。

ナリの企画・開催等を通じて、当地で生活する在留邦人の健康及び福祉の向上にご尽力されたことにより、外務大臣表彰を受賞されました(本報告は懇談会を通じて情報提供をいただき、外務省HPを参考に作成しております)。出典:「JAMS NET・ドイツ代表馬場恒春氏に外務大臣表彰の授与決定(令和六年八月一日)」(外務省HP)

受賞報告 海外日本人研究者ネットワーク(UJA)

論文賞2024を受賞して

附属病院／高度救命救急センター 助教 **今 智 矢**

二〇二四年五月十一日にオンライン開催された「UJA outstanding paper award 2024」において、論文賞(奨励賞)を受賞いたしました。今回、筆頭著者として報告した「Neuronal SNCA transcription during Lewy body formation」が海外日本人研究者ネットワーク(United Japanese Researchers Around the World, UJA)に評価していただきました。大変名誉ある賞ですので光栄に感じております。

今回の研究は留学先のカナダ・トロント大学で行ったものです。レビー小体はパーキンソン病およびレビー小体型認知症で特徴的に出現する病的構造物です。レビー小体は α -シヌ

クレインが凝集したもので、その形成過程における α -シヌクレイン遺伝子の発現制御については不明でした。本研究では、新規 α -シヌクレイン遺伝子発現制御技術であるRNAscopeと α -シヌクレイン免疫蛍光を組み合わせて、正常ニューロン、レビー小体前駆体、レビー小体における α -シヌクレインRNA密度を詳細に解析

しました。結果、 α -シヌクレインRNAは正常ニューロンでは多量に発現しているものの、レビー小体では少量しか発現していませんでした。私は初めにこの所見を見つけた時、「このことを知っているのは世界で自分しかないに違いない!」と非常に興奮し、ワクワクしたことを鮮明に覚えております。サイエンスの喜びはまさにそういう瞬間を得られることではないかと思つたものです。

本寄稿によりUJA論文賞の存在を知っていただき、賞に応募する本学関係者が増えることを期待しております。筆末ではありませんが、早く留学に送り出してくださいました脳神経内科学講座の先生方に深謝いたします。本賞の受賞を励みに、今後も目の前の患者さん一人一人を大切にしながら、診療・教育・研究に邁進して参りたいと思っております。



第7回櫻井医学研究賞授与式

医学研究科長 **石 橋 恭 之**



櫻井記念医学研究賞は株式会社丸大サクラ薬局からのご寄付を原資として平成二十九年度に設立されました。その目的は、国際的医学研究による研鑽を通じ、大学院医学研究科及び医学部附属病院における研究者の育成、青森県の地域課題である短命県の返上並びに将来にわたる地域医療の更なる発展に資する事業を支援することにあります。特別賞は一件三百万円以内、若手奨励賞は百万円以内としており、選考に当たってはこれまでの国際共同研究の実績のみならず、今後の研究計画を審査し、受賞者には研究論文を成果として求めることにしております。

第七回目となる今年度は四月に公募を開始し、特別賞に二名、若手奨励賞には二名の応募がありました。研究推進委員会における厳

正な選考の結果、特別賞はゲノム生化学講座准教授の藤田敏次先生の「enhP法を利用した筋ジストロフィーの治療標的の同定」が選出され、七月十七日の教授

会にて承認・決定されました。若手奨励賞に申請された二件は、共に選考委員の絶対評価点数は高かったのですが、本賞の公募要項に

(次ページへ続く)

(前ページより)
ある国際共同研究に当ては
まらなかつたため、受賞対
象から外れてしまいました。
令和六年十月三日に第七
回櫻井医学研究奨励賞式
が、医学研究科大会議室に
おいて、丸大サクラ牛薬局
会長の櫻井清様、同顧問の
櫻井雅子様ご夫妻並びに福
田眞作学長にご列席賜り行
われました。医学研究科長
挨拶の後、今回の特別賞受
賞者である藤田先生に助成
金が贈呈され、福田学長並
びに櫻井会長よりお祝いの
挨拶を頂きました。藤田先
生からはお礼のご挨拶と受

賞対象となった研究に関す
る説明がなされました。最
後に参加者全員で記念撮影
を行い、授賞式は終了いた
しました。

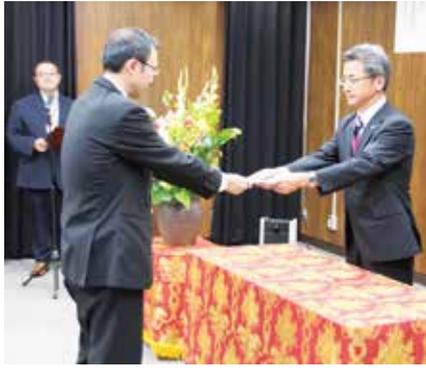
特別賞を受賞した藤田先
生の研究は、オリジナリ
ティの高い手法によりメチ
ル化の分子機構を明らかに
し、難病である筋ジストロ
フィーの病態解明に役立つ
ものと期待しております。
今回、若手奨励賞は選ば
れませんでした。今後は
国際的な共同研究を進めて
いただき、是非また来年の
奨励賞に申請していただき
たいと思います。

特別賞を受賞して

ゲノム生化学講座 准教授 藤田敏次

この度は、第七回櫻井医
学研究賞(特別賞)を賜り、
誠にありがとうございます。
はじめに、株式会社丸
大サクラ牛薬局取締役会長
櫻井清様、同顧問櫻井雅子
様、審査委員の先生方、関
係者の皆様、また、普段ご
指導いただいている藤井穂
高教授に深く御礼申し上げ
ます。

今回ご評価いただきました
研究は、「enChIP法を利用
した筋ジストロフィーの
治療標的の同定」になりま
す。筋強直性ジストロ
フィー1型(DM1)
は、筋肉の萎縮や筋力
の低下を症状とする難
病指定の疾患であり、
根本的な治療法は存在
していません。十万人
当たり七人程度の発症
率の疾患であり、原因
遺伝子としてDMPK
遺伝子が同定されてい
ます。DMPK遺伝子
は、遺伝子の3側非翻



訳領域にCTGの三塩基か
らなる繰り返し(CTGリ
ピート)を持つており、C
TGリピートが過剰に多く
なることで、DM1が発症
することが報告されていま
す。今回の研究では、当研
究室で開発した遺伝子座特
異的クロマチン免疫沈降法
の一つであるenChIP法と
いう技術を用いて、イストラ
エルの共同研究者と協力作
しながら、DM1変異を持つ
変異ヒト胚性幹細胞などか
らCTGリピートの増幅・

令和6年度 教育に関して優れた業績を上げた教員を受賞して

臨床検査医学講座 講師 糸賀正道

この度「教育に
関して優れた業績
を上げた教員」と
して表彰してい
た。誠に光栄に
思うとともに心か
ら感謝を申し上げ
ます。

以前所属してい
た大学より、臨床
技能・態度を評価
する客観的臨床能
力試験である
Objective Structured
Clinical Examination (OS
CE)にて学内指導者・評
価者として学生の教育に少
しずつ携わって参りまし
た。本学に移ってから今に
至るまで、臨床実習前OS
CEでは胸部・バイタル・
医療面接・感染対策とい
くつかの分野において学内
の指導や評価だけでなく外
部評価者として携わり、臨
床実習後OSCEにおいて
も同様に学内・外部評価者



として携わってきたこと
が、今回評価いただいたと
思っております。

OSCE評価者を行って
おりますと様々な問題点が
見えて参ります。特に最近
非常に問題であると感ずる
ことは、臨床実習前OSCE
Eできていた臨床的スキル
が、臨床実習後OSCEで
は全くできなくなっている
学生が多いことです。これ
は本学だけの問題ではなく
全国のどの大学でも同様で

維持に關与する蛋白質を同
定し、同定蛋白質が關与す
る分子機構の解明を進めて
いきます。CTGリピート
増幅・維持の分子機構を解
明することで、それを標的
とした治療薬の開発につな
がります。DM1の治療法
の確立を目指して、今回の
研究を進めていきたいと考
えています。



今回いただきました研究
費を有効活用し、本国際共
同研究および本学の国際化
に向けて取り組んでいきたく
と思います。また、当研

はないかと思ひます。ここ
最近新型コロナウイルス
の影響で十分な臨床実習が
できなかったこともありま
すが、約二年間の臨床実習
で変なクセがついてしま
い自己流のものになってしま
っている印象があります。聴
診を例に挙げると、骨の上
を聴診するなどの聴診部位
が明らかに誤っている、
二・三カ所しか聴診しない
で心音・肺音を判断する、
イヤープースの向きが誤っ
ているなどの間違つた臨床
的スキルが見受けられる学生
が意外に多いことに驚かさ
れます。臨床実習での診療
科ごとにとつかりとした指
導が必要であるという教員
側の問題もあるかと思ひま
すが、それ以前に学生自身
が臨床実習前OSCEで学
修している基本的な技能を
定期的にブラッシュアップ
しながら臨床実習に臨むこ
とが重要であると思ひます。
この基本的な技能の自己研鑽
については、医師として継
続的に行うものであり、臨
床実習前OSCEから十分
指導していく所存です。そ
の他、まだまだ問題点は残っ
ておりますので、今後のOS
CE指導で少しでも解決で
きるよう精進して参ります。

最後に、この賞に御推薦
していただきましたこと
に、この場をお借りして改
めて御礼を申し上げます。
また、呼吸器内科学講座の
皆様、感染制御センターの
皆様、臨床検査医学講座・
検査部の皆様に心から感謝
を申し上げます。今後とも
御指導・御鞭撻よろしくお
願ひいたします。

附属病院 総合臨床研修センター
助教 市川博章

この度は、栄誉ある「教
育に關して優れた業績を上
げた教員」として表彰いた
だき、大変光栄に感じてお
ります。様々な形でご指
導・ご支援いただいた皆様
に、まずは心より御礼を申
上げます。

私は主に循環器腎臓内科
の臨床実習(クリニカル
ラークシップ)担当を三年
前から、臨床前OSCE胸
部診察のチーフを昨年度か
ら担当しております。昨年
度までは直接講義はしてお
りませんので上記二点の活
動・指導が評価されたので
はないかと考えておりま
す。私自身は教育法を確立
しているわけではありませ
んが、僭越ながら普段学生
に対して行なっている教育
について記載したいと思ひ
ます。

まずクリニカルラーク
シップについては忙しい臨
床の合間を縫いながら指
導に対して協力いただいた
教室の先生方に感謝を申し
上げます。私一人ではでき
ないことはそれほど多くな
く、懇切丁寧に教育したこ
とが学生さん達に好評で
あったと思ひます。私
個人としては学生さんに対
しては用事がなくても声が
けをするようにし、時には
緊張をほぐすようなジョー
クを交えることもありま
す。最近では心根のいい学生
さんが多く笑顔で対応して
くれます。本質の医学教育
については先進医療ほど教
えるのは難しく、型通りの
説明に落ち着いてしまうこ
とが多いです。なるべく身
近なものを例えにして教え
るようにしております。五
感をフルに使った診察も身

に付くことが多く、積極的
に聴診や触診、診察、心電
図など直に行うことで身体
診察の技術を学んでもらえ
ればと思ひます。医療
面接についても新患対応の
際に、実際に医師になった
自分を想像して何が足りな
いか、これからのクリニ
カルラークシップでどの
ように学べば、医師となっ
たときに役立つのかという
点で学生さんにはお話をす
るようになっていきます。
次に臨床前OSCEにつ
いてですが、こちらにつ
いては評価者の経験が一度し
かない中、昨年チーフに大
抜擢させていただきまし
た。わからないことだらけ
で、胸部診察を担当した教
員や学生の皆様
にはかなり心
配・苦勞をかけ
てしまったかも
しれません。不
明な点につ
いては前任者に相談
しながら、あと
は各部屋を回っ
て学生がしっか
り身体診察を理
解できている
か、こまめに指
導したのが良
かったのかもし
れません。余裕
がなく当時のこ
とはあまりよく
覚えておりませ
んが、OSCE
の試験で誰一人
不合格者が出な
かつたため、あ
る程度は満足の
いく教育ができ
たのではないかと
思っております。
本年度は昨



年度の経験を活かしより実
りある臨床前OSCEに
できればと考えています。
最後に、教育とは完成形
はなく、時代とともに様
変わりしていくものと思
っています。また臨床診療や
研究に比べて成果を形で示
すことは難しく、教育への
評価が後回しにされがちで
す。しかし少子化がさらに
進み、医学部も定員割れを
起こす時代が来るかもしれ
ません。競争相手が少なく
なり学生の学力レベルが下
がることも考えられます。
そのような時代にこそ教育
は重要になってくると思ひ
ます。この度はこのよう
な栄誉ある賞をいただき身
余る光栄と思ひますが、さ
らに精進し弘前大学の教育
向上の一助となればと思
っております。

令和6年度 弘前大学医学部 解剖体慰霊祭

生体構造医学科学講座 教授 下田 浩



弘前大学医学部および同附属病院において系統解剖、病理解剖、ならびに法医学解剖のために御遺体を捧げられました御霊に対して、弘前大学医学部解剖体慰霊祭が令和六年十月一日午後一時三十分より弘前文化センター大ホールで挙行されました。慰霊祭にはご遺族六十名ならびに本学白菊会会員四十名の方々にご臨席賜り、また各方面から多くのご来賓をお迎えし、医学科および保健学科の教職員と学生が参列してしめやかに執り行われました。式に先立ち、弘前大学医学部管弦楽団による献体者慰霊のための演奏が行われ、会場全体が肅然とした空気に包まれました。まず初めに医学の教育と発展のために本学にご献体いただきました御霊三七四柱に対して参列者全員による黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りいたしました。



続いて、ご献体なされた方々（ご遺族のお許しを得られた方のみ）のご芳名が奉読されました。そして、石橋恭之医学部長より祭詞が述べられました。その後に引き続き、医学科二年生の稲村柚里香さんが学生代表としてご献体いただきましたご遺族への厚い御礼の意が込められた弔辞を捧げました。その後、石橋医学部長、袴田健一附属病院院長、敦賀英知保健学科長、福田眞作学長、医学科二年生の精山明恵さん、保健学科四年生の浅水空さん、千葉正司白菊会理事長による代表献花が行われ、袴田附属病院院長よりご参列いただきました方々へ御礼の言葉が述べられました。最後に、参列者全員で献花を行い、慰霊祭は滞りなく終了いたしました。

納骨施設に献体者名簿を納めました後、黙祷を捧げ、医学部長による代表献花を行いました。その後、同埋骨施設にて黙祷と医学部長、白菊会理事長、続いて参列者による献花を行いました。最後に筆者よりご参列頂きました方々に御礼のご挨拶を述べさせていただきます。参拝式は無事終了いたしました。

当日は有難いことに昨年に引き続き晴天に恵まれました。暖かな日差しの中で時折吹き抜ける爽やかな風に秋の訪れを感じる墓地公園にご参列頂きました皆様静かで穏やかなお顔が心に染み入る一日でした。

令和6年度 秋季学位記授与式

医学研究科長 石橋 恭之

令和六年九月三十日(月)に50周年記念会館みちのくホールにて、令和6年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式が執り行われ、その後医学研究科学位記伝達式が行われました。修了者の皆様、学位取得者におめでとうございます。

当日の式典には秋季修了者十三名のうち五名の方に参加いただき、福田眞作学長より代表者に学位記が手渡されました。医学研究科の修了者ほとんどは社会人大学院生として入学しています。仕事や臨床業務をこなしながら、実験の計画から実施、データ解析、論文作成、そして論文アクセプトまでの作業、その道のりは大変なことだったと思



令和六年六月に、国際的な医学教育の推進のため、学務委員長をはじめとする視察団が長庚大学医学部を訪問しました(写真)。その後、臨床実習学生の Externship program ならびに両大学の研究者交流につ

台湾・長庚大学医学部との 部局間協定を締結

学務委員長 富田 泰史

令和六年十一月六日、台湾の長庚大学 (Chang Gung University) 医学部と教育・研究活動を連携して推進していくための部局間協定を締結しました。長庚



令和6年6月に医学教育視察のため長庚大学医学部を訪問した。左から Hsieh 教授 (長庚大学医学部長)、三上教授、漆館教授、私、花田教授、Chaou 教授

した。本協定締結により、両大学の学生は原則として四週間、相互の医療機関において臨床実習に参加することが可能となりました。今後は、両大学の交流が活発に行われ、国際水準の医学教育・研究のさらなる発展が期待されます。

ポリシーによると、『弘前大学は、変化が激しく、将来予測が困難な時代にあつてこそ力を発揮できる主体的・能動的な探究者を育み、高い倫理観をもって知的探究に取り組むための三つの力を身に付けた者に対して学位を授与する』とあります。それは、①学際的な教養と高度な専門性を身に付け、学術的観点から自然や社会を見通す力、②学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力、③常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の三つとなります。学位取得にあたっては、所属講座の教授をはじめとする教員の方々のご指



導、また家族や周囲の方々との協力もあつたかと思えます。学位を取得された先生方は、今後後輩の学位取得へのアドバイスなど、指導的立場を担われることを期待しております。また、各講座の先生方におかれましては、講座の研究推進、後進育成のためにも、大学院での学位取得を勧めていただき、大学院充実へのご協力をお願いいたします。

令和6年度 弘前大学医学部医学科 スクリーニングを開催して

入試専門委員長 上野 伸哉 (脳神経生理学講座 教授)

令和六年八月七日(水)十三時から医学部基礎大講堂にて弘前大学医学部医学科スクリーニングを開催しました。基礎大講堂は多くの参加者のため、会場である基礎大講堂のエアコンもフル稼働のなか、以下の内容を紹介しました。弘前大学医学部医学科 P R 動画 (<https://www.med.hirosaki-u.ac.jp/web/movie.html>) を視聴後、1) 医学部長の石橋恭之科長から「弘前大学医学部の歩みとこれから」、2) 学務委員長富田泰史先生より「弘前大学における医学教育」、3) 入試専門委員長



上野より「弘前大学総合型選抜の概要」を行った後、青森県健康医療福祉部より「弘前大学医師修学資金支援制度について」を紹介いただきました。このスクリーニングは総合型選抜が対象であるため、参加者は、青森県を中心に東北六県および北海道出身のかたが参加し、例年約百名程度で推移しています。総合型選抜の募集はすべて地域枠であり、「青森県内枠」及び「北海道・東北枠」があります。主な要件として卒業後直ちに青森県のキャリア形成プログラムに就くこと、臨床研修を含む九年間(内四年間は医師の不足している地域)医療に従事することが規程されています。また令和七年度入試の大きな変更点として「青森県内枠」貸与の要件は廃止となりました。詳細は今後の青森県庁サイトにて確認願います。入試内容、形態は今後も変更がありますが、地域に根差し、世界にはばたく人材を求め育てることを目的としています。本スクリーニングの最後は質疑応答の時間を設けていますが、将来の受験生、さらには医師となる高校生から非常に活発、熱心に医療、医学に関する具体的な質問が多く寄せられました。是非弘前大学に入学生んでほしいと思います。

中学生×医師交流 プログラムに参加して

附属病院/周産母子センター

講師 小林 完

夏休みの真っ最中である八月九日に開催された「中学生×医師交流プログラム」内の「医師との交流」セッションに参加させていただきました。

当日は午前中が医学生との交流、現場視察が行われ、午後から当該セッションとなっていました。参加した中学生十二名は疲れた様子もなく、とても元氣滲刺としていました。医師の自己紹介のあと、中学生か

また「新型コロナウィルスは何故こんなに流行したのか、これまでのウィルスと何が違うのか」というようなかなり専門的な質問まで飛び出し、中学生の瑞々しい感性・考え・洞察力を間近に感じることができました。医師志望、医師以外志望のどちらの中学生も参加していましたが、ぜひ頑張ってくださいと夢を叶えて欲しいと願わずにはいられません。

今回の企画は中学生にとつて貴重な機会であったかと思いますが、同時に我々医療従事者側にとつても貴重な機会をいただけたと思っています。企画運営いただいた関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

開催報告 第67回 全国医学生ゼミナール

医学科五年 早坂 脩真
(医ゼミ・現地実行委員長)

二〇二四年八月十六日(金)から十八日(日)の三日間にわたり弘前大学文京キャンパス(50周年記念会館・総合教育棟)にて、第六十七回全国医学生ゼミナールが開催されました。「こころの

健康を考える」をメインテーマに掲げ、三日間で全国各地から医療系学生百二十六名、一般参加者六十三名と、多くの方が参加し、学びや交流を深めました。

全国医学生ゼミナール(通称医ゼミ)とは、全国から医療系学生が集い、「よりよい医療従事者になりたい」という想いを実現するために、自主的に学び、交流する企画です。六十七回目を迎える今年の主管を弘前大学が担いました。

本企画では、「こころの健康を考える」「人権と生命の尊厳から考える生殖医療」の二つのテーマについての学習発表のほか、講演会では、日本医科大学千葉北総病院救命救急センター



開催報告

令和6年度弘前大学大学院医学研究科公開講座 「子どもの健康」 ——最近の話題——

小児科学講座 教授 照井 君典

今年の医学研究科の公開講座は、「こどもの健康——最近の話題——」というテーマで、九月六日(金)の十八時から二十時まで講義棟で開催されました。

当初、例年通り現地開催のみで予定でしたが、子どもがいる家庭では忙しい時間帯であることを考慮し、オンライン配信を併用することにしました。この考えは正しく、実際に

今年度の医学研究科の公開講座は、「こどもの健康——最近の話題——」というテーマで、九月六日(金)の十八時から二十時まで講義棟で開催されました。当初、例年通り現地開催のみで予定でしたが、子どもがいる家庭では忙しい時間帯であることを考慮し、オンライン配信を併用することにしました。この考えは正しく、実際に



開催報告

令和6年度弘前大学大学院医学研究科「健康医療講演会」 「体重は健康のバロメーター」 「お腹まわりが気になるあなたへ」

社会医学講座 教授 井原 一成

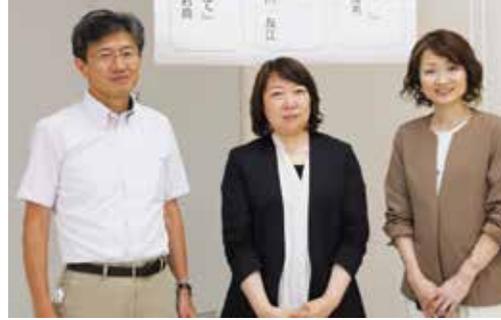


て三十分ずつ講演が行われました。最初に三沢市立三沢病院小児科の鈴木友希先生が「こどものアレルギー——うまくつきあおう!——」というテーマで、アレルギーマーチなどの総論から、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、気管支喘息、アレルギー性鼻炎などの各論まで、ご自身が持っている指導法も含め詳しく解説されました。

次に国立病院機構青森病院小児科の品川友江先生が「発達障害(神経発達症)を知ろう」というテーマで、神経発達症、自閉症スペクトラム障害(ASD)、注意欠陥多動症(ADHD)の一般的な解説に加え、それぞれの特性の強みを活かした支援などについても具体的に解説されました。

最後に私が「小児とAYA(思春期・若年成人)世代のがんについて」というテーマで、小児・AYAがんの一般的なことから、診断・治療法の進歩、日本小児がん研究グループ(JCOG)による全国規模の取り組みや、弘前大学小児科の取り組みなどについて解説しました。

アンケートの結果をみると、「もっと長く聞きたかった」、「もっと詳しく聞きたかった」といった感想も目立ち、こどもの健康に対する市民の関心の高さが伝わってきました。



今年度の二月～三月には、ATVテレビ診察室で、こどもの健康に関するテーマを七週にわたり取り上げていただき、これからも引き続き市民・

令和6年度弘前大学大学院医学研究科「健康・医療講演会」
体重は健康のバロメーター
 お腹まわりが気になるあなたへ
 令和6年10月26日(土) 14:00~16:00
 入場無料
 会場 新町キユーブ3階会議室
 講師 青森県立中央病院 院長 丸山 博行 先生
 講師 弘前大学大学院医学研究科 内科学専攻内科学講座 教授 藤田 征弘 先生

(前ページより)
 他方で、両講師とも、短い平均寿命や、それと健康寿命の差が大きいこと、BMIの高い人が多いことなど青森県の現状に触れて話を進められたことも印象的でした。参加者には、メタボリックシンドロームや肥満症、糖尿病の特徴や違いとともに、県民の健康課題をご理解いただけたのではないかと思います。

楽しく充実した内容の講演会に参加者がやや少なかったのは残念でしたが、講師と参加者の距離が近く

学生だより

学生だより

ハワイ大学夏季研修に参加して

医学科六年 松井美緒



Cancer center

二〇二四年八月十六日から二十一日まで、Hawaii Clinical Clerkship Preparation Programに参加し、St. Lukes Hospital、Kuakini Medical Education Institute (SMEI)への参加等、多くの貴重な経験をさせていただきました。病院見学では市中病院やクリニックの集中治療室や診察室、検査機器等の設備を見学しました。

ハワイ大学夏季研修に参加して

医学科五年 下田代 萌 愛

私は今年の夏、ハワイ大学夏季研修とHCCPPに参加しました。ハワイ大学医学部の夏季研修では、十日間にわたり貴重な学びと体験を得ることができました。プログラムでは、アメリカでの一般的な医療面接や身体診察の流れを講義で学んだ後、実際に現地の模擬患者に対して診察を行う機会がありました。またハワイ大学の医学生とともにPBL(問題基盤型学習)を行い、禁煙外来の実践やロボットを用いたシミュレーション実習、病院見学なども体験しました。これにより、アメリカの医療教育を間近で感じることができました。特にPBLは、日本語でも難しい学習形式ですが、英語で行うことで

SMEIではJABSONMにおいてPBLや医療面接、シミュレーション実習等を現地の学生と共に、ハワイの医学教育に触れ、またご厚意でCancer centerのオフィスや実験室等も見学し、研究施設の雰囲気も知ることが出来ました。交流会では、BBQやディナーを通してハワイで活躍されている日本人の先生方から米国でのキャリアや臨床・研究との両立等についての貴重なお話を伺いました。どの先生も大変快くお話を下さり、自分の今後の臨床や研究、英語学習へのモチベーションとなりました。ハワイでは主体性や積極性、そして結果が求められる

さらに難易度が上がり、学びの深さを実感しました。放課後にはハワイ大学や日本から参加している医学生とのアクティビティーがあり、とても仲良くなることになりました。フラダンスやレイづくりなど文化交流の機会もあり、自由時間にはサーフィンやシュノーケリング、ハイキングも楽しむことができました。勉強以外の時間では、ハワイで活躍する日本人医師との交流があり、その交流を通して日本以外で働く新たなキャリアの可能性に気づき、視野が大きく広がりました。彼らは行動力にあふれ、夢に向かって努力を重ねてきた方々ばかりで、その輝く姿がとても印象的でした。

医学はもちろん、アメリカの医療システムや医学教育について学んで、ハワイの自然や文化も満喫でき、充実した研修になりました。最後にありますが、このような素晴らしい機会を与えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科五年 加賀 巧 真

私は将来臨床留学をしたと考えており、しかしまだ海外留学の経験がないことに加え、海外で医師として働く具体的なイメージがなかったため、実際にまずは自分の目で海外をみて見ようと思い、HCCPPに申し込みました。現地で働かれています先生方のお話は一人一人全く違うエピソードで、沢山の苦労があったはずなのに、とても楽しそうに話されていました。

また、JABSONMでの学習もとても印象的でした。英語でのPBL、医療面接は日本語で分かっていたとしても、医学英語を知らなかったり、スピーキングの力が不足していたりすることで十分な説明ができなかったのが悔しかったです。現地の学生は、皆とても優しく、私たちが存分に学び、そしてハワイという土地を味わえるように沢山の場面で支えてくれました。日本の他の大学の学生の存在もとても刺激になりました。下の学年でも私より英語を話し、医学の知識がある方が沢山いたり、私と同じように臨床留学を志し、努力をしている方と出会ったりとこれからも共に刺激し合っていきたい仲間ができました。

最後にありますが、今回の留学に参加させてくださった弘前大学、受け入れてくださった町先生やJABSONMの先生、学生方、そして共に沢山学んだ二〇二四年HCCPPの参加者の皆さん、本当にありがとうございました。

コラム

医学部こぼれ話

昨年七月に「入院棟東」が稼働した。これは昭和六十三年築の「第一病棟」に代わるものである。私が医学部に入学してからでも「第二病棟」、「中央診療棟」、「高度救命救急センター」、「外来診療棟」と(順序は曖昧であるが)整備されてきている。今後、「第一病棟」リフォーム後に現在の「臨床研究棟」が移転予定であり、この三十有余年、気がつけば工事・移転を繰り返している印象がある。

当時の外来診療棟と現在の臨床研究棟の「一階」は「三階」と呼ばれていた。「第一病棟」が完成した頃は、お見舞いに来た方が病棟の一階でエレベーターを降りて帰ろうと歩いていると、外来診療棟の「三階」にながっていたので、よく首を傾げていたのを思い出す(その後、外来診療棟の「三階」を「一階」と呼称を変更しただけで解決!)

本町地区は土地が限られているため、駐車場も狭く、「第一病棟」建設時に新しい土地に移転新築してくれていけばと工事のたびに思ったが、先輩医師から鍛冶町の皆様の反対に教授陣が折れたかららしいよ」と嘘か真かわからない話を教えてくれた。

数年前に某大学病院が市街地から郊外に新築移転した。羨ましく思ったが「患者さんにとっては思ったより遠く感じるようで、市内の県立病院と市立病院の患者増に繋がっている」らしい。

ハワイ大学夏季研修に参加して

医学科五年 杉澤 尚 帆

八月にハワイ大学医学部に於いて約十日間の短期留学に参加させて頂きました。思い返せば入学時、もらった医学部のパンフレットを見ていつか参加できたらと期待を膨らませていました。今回こうしてハワイでの短期留学が実現し、夢のような十日間でした。JABSONMで出会った現地の医学生たちは、こちらが圧倒されてしまうほどエネルギーに溢れていました。また、彼らの勉学に對する熱意には感心せざるを得ませんでした。それは競争社会のアメリカで医学を志すことがどれほど大変なことなのかを物語っていました。日本から同プログラムに参加した各大学の医学生も、高度な医学知識、英語力を発揮していました。自身の英語力も未だ十分とは言えない私にとって、海外挑戦に対する壁の高さを突きつけられる形となりました。一方で、こうした厳しさを肌で感じることで



き、今後の取り組み方が少しだけ明確になったような気がします。また、大学での活動の他にも、自由時間を使ってハワイの地を満喫させて頂きました。景色、食事、空気が感度が素敵な思い出となりました。(次ページへ続く)

(前ページより)
お世話になった全ての方々へ感謝申し上げます。ありがたうございました。

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科五年 峯 正 隆

ハワイ大学での夏季研修を終えて一番印象に残っているのは、現地の学生の優秀さに圧倒されたということ。優秀といっても、単に医学知識が豊富であるだけでなく、一人一人が積極性や知的好奇心、そしてリーダーシップに満ちており、とても魅力的に感じました。また、この研修に参加していた日本の他大学の学生たちの医学知識や英語力も非常にレベルが高く、短期間の研修でしたが、そのような学生たちと過ごす中で多くの刺激を受けました。さらに、ハワイで働く日本人医師の方々の話を伺う機会もありました。その中で、どの先生も「諦め

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科五年 伊 藤 紳 一 郎

今年の夏、ハワイ大学医学部(JABDOM)の夏季研修プログラムに参加しました。初めて訪れたハワイは温暖で美しい自然に溢れ、広大なキャンパスに足を踏み入れると、開放的な雰囲気と充実した施設、そして温かいスタッフの方々に迎えられ、研修が始まりました。
プログラムでは、PBLや身体診察、診療面接など、英語を用いた実践的な医療実習に取り組みしました。中でも印象深かったのは一対一での模擬診療でした。適切に伝えるために英語の正確さにこだわってコミュニケーションに苦心しましたが、現地の学生たちに助けられながら積極的に話す中で、非言語的な表現の大切さに気づきました。その後のフィードバックでは適切な振る舞いや表現について議論し、患者さんとの良好な関係づくりについて考えを深めることができました。



人学生との交流を通じて、各々の思い描く理想の医師像や、国際医療への思いを分かち合えたことは有意義でした。
一週間という限られた時間でしたが、この海外での学びは忘れられない貴重な経験となりました。世界の医療現場をより身近に感じ、診療における意思疎通の重要性と相互理解の必要性を改めて実感しました。同時に、将来臨床や研究において国際的に活動することに強い魅力を感じました。この研修で得た学びと感謝の気持ちを胸に、これからより一層グローバルな視野を持つ医療者を目指して日々研鑽を積んでいきたいと思っています。

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科五年 森 萌 音

今回の研修では日米の医学部教育の違いを学ぶことができました。
ハワイ大学では講義をただ座って聞くという授業はごく一部に限られます。弘前大学で四年次に行うPBLのような能動的な学習がベースになっており、提示された症例問題に対して自分たちで疑問点を出し、調べてまとめていくというような形式が低学年から採用されています。与えられる知識をただ頭に流し込む・疑問を持たないまま暗記の

作業をするというような受け身ではない点が大きく異なり、それが勉強への意欲や学生の積極性に繋がっているように感じました。現地の二年生は、既に自分たちと同じ、あるいはより高いレベルの医学的議論ができることが印象的でした。また学生の間には複数の論文作成に取り組みすることも一般的であり、大学生としての過ごし方の差も感じました。
アメリカでは様々な背景を持つ人がいることが教育の徹底的な体系化に繋がります。

ハワイ大学での有意義で濃密な一週間

医学科五年 下 倉 佑 太

本プログラムは、ハワイ大学の学生に加え、日本国内の他大学の学生とも交流を深め、多様な視点と知識を得ることができた非常に貴重な機会でした。PBLや講義に加え、気管支鏡などの手技や模擬患者を対象とした医療面接、身体診察の実践まで、多岐にわたる充実した内容が盛り込まれており濃密な一週間だったと思います。
特に強く心に残ったのは、米国のチーム医療における医師以外の専門職の重要性です。日本と比較して遥かに多様な職種が専門性を発揮し、それぞれが高度に連携している点が非常に印象的でした。また米国の医学教育において強調されている「アウトプット」と「フィードバック」の徹底は、学びを即座に実践し改善するという非常に効果的なプロセスだと感じました。実際にプログラム中の医療面接では個々に対して詳細なフィ



最後に、この貴重な機会を提供してくださった全ての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。本プログラムに参加して得た多様な知識や経験を、将来の医療の実践で最大限に活かしていきたいと思っています。

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会贈税医学振興会発足(任意団体)
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
○医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
○医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
○地域医療の振興に寄与する事業への支援
○海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

◎寄附のお願い

青森県の医学・医療の発展を促進するための各事業活動の一層の充実を図って参りたいので、皆様の格別のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。随時、ご寄附を受付しております。
本会の公益目的事業に対する寄附金は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

◎当会への入会のご案内

当会の事業活動に継続的にご支援・ご協力をいただける方は、ご入会くださるようお願い申し上げます。年会費は次のとおりとなっており、年会費も寄附金と同様に、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

会員種別	年会費
医学部教員	1万円
医学部卒業生等	2万円
賛同する個人	2万円
賛同する団体	10万円

◎ご支援ご協力いただける方のご連絡をお待ちしております。

【問合せ先】 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872
学内内線 6519
E-mail: info@aomori-mpm.jp

ハワイ大学夏季研修に参加して

医学科五年 清 水 優 花

今回ハワイ大学医学部での夏季研修に参加させていただきました。幼い頃から海外で働きたいという漠然とした思いがあり、今回の研修も入学した頃から参加したいと思っていました。
プログラムではPBL、身体診察、医療面接、BSL、フィードバックが行われ、その効果を実感するとともに、JABDOMの学生は月に一度その機会を得ていると聞いて大変驚きました。



最後に、この貴重な機会を提供してくださった全ての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。本プログラムに参加して得た多様な知識や経験を、将来の医療の実践で最大限に活かしていきたいと思っています。

医師が行い、最初から最後まで患者さんに寄り添う姿勢が素晴らしいと思います。またこれらの診察や面接を行った後に一人一人フィードバックをいただくことができ、自分が何ができなかったのか学ぶことができ、スキルアップできるとともに良かったこともフィードバックしてもらえ、とても分かりやすく教えてくれて勉強熱心で見習わなくてはいけないと思いました。英語でのPBLや診察は難しく間違えることを恐れてしまっていました。先生が間違っても正しくてもそれを皆で討論することで理解が深まるし、何より楽しいと思いました。
一番印象に残ったことは患者さんに対して向き合う姿勢です。医療面接や診察ではまず患者さんを不安にさせないようなノックの練習から行いました。患者さんの移動の介助も診察する

学生だより 米軍三沢病院夏季研修

近くのアメリカで学んだこと

医学科六年 林 玲奈

米軍基地には今までも何度か訪れたことはありましたが、その度に本当にアメリカに陥るような不思議な感覚に陥ります。久しぶりに基地に足を踏み入れて、言語や文化も全く異なる異国の地に自国の空間を作り上げられるアメリカの凄みを改めて感じました。

基地の住人は基本的に軍人とその家族のみであるため、若年者が多く、病院の患者にも高齢者はほとんどいませんでした。緊急疾患が少ない代わりに、メンタルヘルス、性感症、婦人科に関する疾患が目立ちました。中でもメンタルヘルスに関する主訴が多く、訴えの強さや症状によって、銃の所持の規制を行うなど米軍病院ならではの症

青森で体感するアメリカの医療

医学科六年 関 美齡

八月五日から九日までの五日間、三沢米軍基地内にある病院で夏期研修に参加しました。研修では、家庭医学、救急、産婦人科、小児科、内科を中心に見学しましたが、整形外科、一般外科、放射線科なども含め、幅広い診療科がありました。特に印象に残ったのは、毎週水曜日の午前中に設けられている産婦人科の避妊外来です。予約なしで来院

が可能で、その場でIUD(子宮内避妊具)や、日本では未承認の皮下インプラント「ネクスプラノン」の挿入が行われていました。初めて見学する処置だったため、想像以上に簡便に行われていたことに驚きました。宿泊は、救急科のD.P. Passerのご自宅に滞在させていただきました。毎晩、おいしいアメリカの家庭料理をふるまっていた

米軍三沢病院夏期研修に参加して

医学科五年 宮崎 理紗

「三沢の米軍基地で研修ができるらしい」と初めて耳にしたときから、「いつか私も」と思っていました。英語が苦手な私に有意義な研修ができるのだろうか、と不安もありましたが、今回、参加させていただけ

「三沢の米軍基地で研修ができるらしい」と初めて耳にしたときから、「いつか私も」と思っていました。英語が苦手な私に有意義な研修ができるのだろうか、と不安もありましたが、今回、参加させていただけ

「三沢の米軍基地で研修ができるらしい」と初めて耳にしたときから、「いつか私も」と思っていました。英語が苦手な私に有意義な研修ができるのだろうか、と不安もありましたが、今回、参加させていただけ

「三沢の米軍基地で研修ができるらしい」と初めて耳にしたときから、「いつか私も」と思っていました。英語が苦手な私に有意義な研修ができるのだろうか、と不安もありましたが、今回、参加させていただけ

米軍三沢病院夏季研修を振り返って

医学科五年 倉本 莉名



八月十九日から二十三日の五日間、米軍三沢病院での夏季研修に参加させていただきました。米軍病院では、内科、産婦人科、整形外科、検査部、Family medicine(患者の年齢・疾患・症状を問わず診察し、治療だけではない予防も行う診療科)を見学しました。医師の他に医療行為を行う事ができる Nurse Practitioner, Physi-

ど、アメリカの医療現場を拝見したことで、日本の医療についても改めて考えるきっかけをいただきました。最後に、このような素晴らしい機会をくださった皆さまに心から感謝申し上げます。この経験を最大限活かせるよう、これからも精一杯励んでまいります。

患者さんやスタッフの方からは勉強頑張ってるね、良い医者になってね、といった暖かい言葉を頂き、現在でも勉強のモチベーションの一つになっています。私のホームステイ先は助産師宅で、三人のお子さんがいらつしやいました。アメリカのTVを一緒に見たり、学校の事について話したりと、賑やかで楽しい毎日を送ることができました。また、共に研修を行なった二人のホストファミリー、米軍病院で面倒を見てくださった小児科医のご家族とホームパーティーを行うなど、アメリカ文化を経験することもできました。今回の研修では英語力不足を実感しましたが、同時にコミュニケーションには挨拶や感謝など人間関係の基本や伝えようとする意欲が重要であることを学ぶことができました。貴重な機会をくださり、本当にありがとうございました。

米軍三沢病院夏季研修を通して

医学科五年 坂本 矢弥

海外での医療活動に興味があり、このプログラムに参加させていただきました。五日間、米軍の夫婦の元でホームステイをさせていただき、日本にいながらアメリカの文化を学ぶ貴重な体験をしました。研修中は、米軍の医師からアメリカの医療の仕組みやキャリア形成、日本では見ない機会がほとんどない銃創の外傷などの講義を受けました。研修中に肌で感じた日本との大きな違いは、アメリカの働き方は、とてもフレキシブルで、自分の生活を優先した仕事の仕方をしていました。私のホストマザーは、病院の事務職をしているのですが、職場での仕事が良い快適になるように自分のオフィスをアレンジしてい

ました。病院の一角とは思えない空間に驚いていたら、「家に帰りたくても仕事があつて遅くまで帰れないときがあるでしょ。そういうときに、自分で自分のケアをすることが大切なのよ。だから、疲れ切つていても落ち着ける空間を作ったの。」と言っていて、とても素敵な考え方だと思いました。それにより心に余裕ができて、他職種との関係性や仕事の質につながるのではないかと思います。今回の研修を通して、医療の違いだけでなく、働き方についても新たな視点で学ぶ事ができました。最後に、このような貴重な機会を設けて下さり、すべての関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

米軍三沢病院研修に参加して

医学科五年 佐藤 宗二郎

私は、海外に行く前の空港で待つ時間、そして到着するまでの飛行機に乗っている時間が好きです。日本の食の食べ納めに空港の高い寿司やラーメンを食べ、機内ではいまだの辺を飛んでいるか何度もマップを確認する。そういう時間で自分なりに半分くらい満足した気分になります。でも今回は、気持ちを整える前にあっさり国境(?)を越え、そのまま病院に直行し、十五分後には外来見学をしていました。初日は朝が早

かったのもあって英語脳に切り替わるのが遅く、いきなり膨大な医学英語が流れこんでくる上、ドクターの話す英語が総じて速く、耳が慣れるまでに時間がかかりました。もともと英語を勉強しなきゃというのはおそらくみなさん書かれています。しっかりと医学を勉強しておくことを強調したいと思います。検査値の略語や正常値は共通ですし、画像ももちろん一緒です。多

弘前大学大学院医学研究科

第8回 若手研究者紹介動画

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第8回目は腫瘍内科学講座の齋藤 約介(さいとう けんすけ)先生。青森県という地理的特徴・年齢分布を生かし『高齢化社会でのがんゲノム検査導入 ①治療効果・予後の解析 ②がんゲノム検査一般化』をご紹介します。

医学研究科ホームページで公開中!

紹介動画はこちら ↓

助教 齋藤 約介 (腫瘍内科学講座)

(前ページより) 少英語を上手に話せることよりも、画像を見て病変部を指させる方が仲良くなれるなど感じました。



お世話になった Dr. Pallett と

たちと遊んだりしました。これからの自分がどうありたいか、そのためにいまだ努力をすべきかを過すことができませんでした。文字数の関係でプログラムの良さを全然伝えきれ

なかったもので、百聞は一見にしかず、ぜひ参加してみたいです。Lastly, I would like to extend special thanks to Dr. Pallett, an OBGYN, for welcoming me into her family.

学生だより 台湾マツケイ病院夏季研修

馬偕記念病院での臨床実習

医学科六年 木村 悠 希

この度、八月十九日から約四週間、台北市にある馬偕記念病院にて臨床実習をさせて頂きました。



小児科 Cardiovascular group の先生方と (左から Dr.Hung、私、Dr.Lee, Dr.Lin, Ns.Yu)

最も感銘を受けた点は現地の医学生や医師達の英語能力です。カルテが英語記載であることを差し引いても第二言語としての力の差を感じました。実習では小児科と泌尿器科を選択しました。小児科では先天性肺動脈狭窄症に対するステ

ント留置術やWPW症候群に対するアブレーション、また日本では出会う機会がなかったファロー四徴症の聴診所見など大変貴重な経験を積むことができました。

若手教員・医師だより

附属病院 放射線治療科 助教 田中 円葵

放射線腫瘍学講座の田中円葵(みつき)と申します。放射線治療科として今年で九年目になります。今回は寄稿の機会をいただきましたので、放射線治療や私が働く環境についてご紹介したいと思います。

放射線治療科に紹介されてくる患者さんはほとんどが癌の患者さんです。癌に対する放射線治療は根治治療と緩和治療に大別されますが、癌を治すことも、治らない患者さんの症状を消失することも同じく放射線治療でできてしまうのは非常に面白い点です。放射線治療科では患者さんの状態やご

泌尿器科では手術と外来を中心に実習を行いました。手術ではTURPやRARPを見学する中で日本の手術室との違いも学習しました。外来では主に前立腺肥大症や尿路結石について学習しました。検査室では実際に腎臓や前立腺をエコーで描出させて頂きました。また、将来泌尿器科を

本人ご家族の希望を加味しつつ、治療のゴール(根治・緩和・通院治療・入院治療・転院・家への退院など)を設定し、そのゴールに向かって医師・医療スタッフ・患者がチーム一丸となって進む治療を行っており、このような仕事内容に非常に感銘を受け放射線治療を志しました。また放射線治療の治療計画も奥深く、たくさん治療計画を作ってみたりと思ったことも放射線治療科を志す大きな要因でした。いまだに治療計画は大好きな時間で、黙々と計画しているとおっしゃる間に時間が過ぎてしまいます。

放射線治療科に入学してから最初の六年間は非常に目まぐるしい日々で、基本的な臨床業務を覚えつつ、大学院を修了し、専門医を取得しました。大変ではありましたが、放射線治療科として一通り基本的なことではできるようになり、やっとスタートラインに立ちました。その後七年目には第一子を出産し、一年間育児をいただきました。のびのびと妊娠・出産・育児を行わせていただき医局の先生方には非常に感謝しております。放射線治療は大好きなので育児からの仕事復帰は楽しみながら頑張っています。復帰後半年ほどで再度妊娠したので結局仕事を復帰したのは一年間と短時間でしたが、①新規導入されたVMAAT専用治療機の臨床導入に携わり、②症例報告を作成・Acceptされ、③外来の担当患者さ

若手教員・医師だより

泌尿器科学講座 助手 尾崎 魁

泌尿器科の尾崎魁と申します。出身は埼玉県ですが弘前大学に入学し青森市民病院での初期研修を終え泌尿器科に入室しました。初期研修後、青森市民病院↓大学病院↓十和田市立中央病院↓つがる総合病院と異動し、今年から再度大学病院に戻ってきました。

手術や腹腔鏡手術、ロボット手術の他、シヤント造設やTURBTなどの小手術もあり様々な手術が行えることを知りました。また海外学会の様子や日々の先生方の働いている姿を見て泌尿器科に興味を持つようになりました。初期研修医の際に泌尿器科を回り実際に検査や手術の助手を行うことができ、また外来では尿路感染症、尿路結石、透析治療、悪性腫瘍治療など内科的な一面も持っている科であることを知り、さらに興味を湧き入局を決めました。現在、泌尿器科医四年目ですが小手術の他、開腹手術や腹腔鏡手術を実際に執刀させて頂いていて充実した日々を送っています。またロボット手術の術者資格も先日取得し今後さらに御指導いただきながらステップアップしたいと思っています。

つがる総合病院では本年九月に国産手術支援ロボット「Intorix(ヒノトリ)」での前立腺全摘除術が行われました。その他、大学病院と同様にダビンチが青森県立中央病院や函館市立病院、三沢病院で稼働しており、このように泌尿器科は大学病院以外の市中病院でも小手術含め様々な手術が可能なのも魅力の一つです。

また泌尿器科の大きな魅力の一つとして海外学会への参加があります。畠山教授の他、上級医の先生方の御協力もあり若手の時から当科では積極

総合文化祭(医学部)を振り返る

医学部医学科代表 医学科4年 櫻庭 小夏

肌寒さを増してきた十月下旬、満を持して開催された弘前大学総合文化祭は、盛況をきわめていました。コロナ禍以降、規模を縮小的に海外学会に参加しています。本年四月に私も初めて海外学会に参加しましたが国内学会とは規模も違い英語での発表や質疑応答は大変貴重な経験となりました。また発表以外には観光をしたり「よく学び、よく遊ぶ」の精神でメリハリをつけて楽しい学会となりました。

泌尿器科は外科的な一面と内科的な一面、そのほか腎移植などマイナー科とは言われていますが分野は多岐に渡り、どれか一つでも興味を持っていただければ幸いです。昨年から畠山教授の新体制となり近年は新入局員も多く泌尿器科は勢いのある科です。学生さん、研修医の先生方、是非お待ちしております。



泌尿器科は外科的な一面と内科的な一面、そのほか腎移植などマイナー科とは言われていますが分野は多岐に渡り、どれか一つでも興味を持っていただければ幸いです。昨年から畠山教授の新体制となり近年は新入局員も多く泌尿器科は勢いのある科です。学生さん、研修医の先生方、是非お待ちしております。(次ページへ続く)



（前ページより）
 や、受験生に向けた、医学
 生からの応援メッセージの
 掲示がありました。文化祭
 最終日には、「産婦人科医
 による米国留学体験記」と
 題して、産婦人科学講座の
 水沼慎人先生による市民公
 開講座が開講されました。
 コロナ禍以降、完全開催
 となった今年の医学科展は、
 よりいっそう、学部や学内
 外を問わず、さまざまな
 方々と交流をもてる、素晴
 らしい機会になったのでは
 ないでしょうか。このよう
 な素晴らしい医学科展が開
 催されたのは、各講座の先
 生方やスタッフの皆様、ご
 賛同くださった多くの皆様
 のおかげだと強く実感して
 おります。まことにありが
 とございます。来年度の
 医学科展の開催にも、ご協
 力いただけますと幸いです。

放射線腫瘍学講座は、昭
 和二十一年八月に初代高橋
 信次教授のもとで開講した
 青森医学専門学校レントゲ
 ン科の流れを汲んだ講座
 で、七十年以上の歴史があ
 ります。昭和二十三年五月
 に青森医専から弘前医科大
 学放射線科へと改組され、
 昭和二十六年に放射線医学
 講座へと名称が変更されま
 した。昭和三十三年十月に
 は篠崎達世が、昭和六十二
 年六月には竹川鉦一が、平
 成八年四月には阿部由直が
 教授となり、その後、大学
 院の部局化に伴い平成十九
 年に放射線科学講座へと名
 称が変更されました。平成
 二十二年五月には高井良尋
 が、平成二十九年七月には
 青木昌彦が教授となり、平
 成三十年一月に放射線腫瘍
 学講座と放射線診断学講座
 に分かれることが承認さ
 れ、現在に至ります。

准教授一名、講師一名、助
 教二名、助手一名、大学院
 生一名の計七名ですが、来
 年度は三名の入局が確定し
 ていますので、全国国立大
 学法人の中でもベストテン
 に入るマンパワーとなり、
 より活発な活動を展開でき
 ることが期待されます。

当講座の研究内容は、放
 射線腫瘍学、放射線物理
 学、放射線生物学、情報科
 学など、多岐に渡ります。
 科研究の獲得のみならず、
 青森県との委託研究、民間
 企業との共同研究にも力を
 注いでおり、その成果は着
 実に増えております。ま
 た、放射線診断科、放射線
 部、保健学研究科、理工学
 部等とも密に連携し、AI
 を活用した医療画像の改善
 や、画像診断技術の応用し
 た癌の新規予後予測法の開
 発、高精度放射線治療計画
 の自動化など、新たな技術
 開発に加え、関連病院とも

連携し、遠隔放射線治療計
 画などの医療DXにも取り
 組んでいます。附属病院で
 は、高精度な外部照射をは
 じめ、密封小線源治療、核
 医学治療、がん温熱療法な
 ど、粒子線治療以外のすべ
 ての医療提供が可能な充実
 した環境にあり、根治照射
 のみならず緩和照射にも力
 を注いでおります。教育に
 ついては、人を育てるには
 教育こそが一番大切である
 との信念で、卒前・卒後教
 育のより一層の充実を目指
 しています。

弘前大学放射線診断学講
 座 対馬史泰です。この度、
 講座紹介の機会を頂きあり
 がとうございます。放射線
 診断学講座は二〇一九年七
 月に掛田伸吾教授が就任
 し、講座として画像診断及
 び血管内治療（インターベ
 ション：IVR）を担う
 部門として活動していま
 す。診療放射線技師や看護
 師と協力し、CT・MRI・
 核医学（PET/CT）の安全か
 つ安心な画像検査の管理を
 行い、得られた画像の全例
 について翌診療日までに画
 像診断報告書（読影レポー
 ト）を各診療科へ配信して
 います。また、院内カンファ

RENDSではキャンサーボー
 ドをはじめ、婦人科、消化
 器内科、神経内科、脳外科、
 病理部と連携し、画像検討
 を通じて診療の充実を図っ
 ています。

IVR分野では、高度救
 命センターや産婦人科と協
 力した塞栓による止血処置、
 消化器内科との肝細胞癌に
 対する肝化学動注塞栓術、
 歯科口腔外科や耳鼻咽喉科
 との頭頸部癌に対する動注
 療法、各診療科からの依頼
 によるCVポート・ICC
 留置、CTガイド下生検な
 どを行っています。二〇二
 一年度には最新の撮影機器
 として、第1MRI（GE
 SIGNA Premier 3T）、第2
 MRI（GE SIGNA Artist
 1.5T）が導入されました。
 これに人工知能である深層
 学習（Deep Learning）処
 理などを応用した高速撮像
 や新しい撮像技術の開発に
 取り組む、その成果を国内
 外に報告しています。また
 世の中はChatGPTなど生
 成AIが話題ですが、昨年
 度より、診療に人工知能を
 応用した肺結節や脳動脈瘤
 検出を支援するAI診断補
 助システムを導入しました。
 「全県朝カンファ」は二
 〇二〇年四月から、大きな
 トラブル無く五年目を迎
 へ（次ページへ続く）

放射線腫瘍学講座

放射線腫瘍学講座 教授 青木昌彦

写真コラム(26) 水害

血管・炎症医学講座 教授 今泉忠淳

近年、日本の各地で、地球の温
 暖化に伴う気候変動による豪雨
 や、頻発する地震による災害が多
 発しています。弘前は比較的災害
 が少ない土地ですが、これまでに
 も、記憶にとどめておきたい災害
 がありましたので、【表】にまと
 めました。岩木山は、気象庁が監
 視している111の活火山の一つ
 で、現在は噴火の兆候は見られま
 せんが、江戸時代には何回も噴火
 しています。昭和52年8月には、
 豪雨により、医学部のすぐ南を流
 れている寺沢川が氾濫し、医学部
 も大きな被害を受けました。その
 時の写真が、血管・炎症医学講座
 に残っていますので、紹介します
 【写真1】。現在の同じ場所が【写
 真2】で、橋のたもとには、当時の水位
 を示した表示があります【写真3】。昭
 和58年の日本海中部地震で、弘前では
 銭湯の煙突が折れるなどの被害があ
 りました。平成3年には、台風19号の強
 風により、りんごの落果をはじめ大きな
 被害がありました。平成23年の東日本
 大震災では、2日間にわたり停電しま
 したが、大きな被害はありませんでした。
 油断しないで生活していきたいもの
 です。



【写真1】 水害。稲荷橋。1977. 撮影者不明



【写真2】 稲荷橋。2024



【写真3】 洪水の水位。2024

【表】 弘前における主な災害に関する年表

1600年	慶長5年	岩木山噴火
1605年	慶長10年	岩木山噴火
1782年11月~1783年6月	天明2~3年	岩木山噴火
1845年	弘化2年	岩木山噴火
1863年	文久3年	岩木山噴火
1977年	昭和52年	豪雨 水害
1983年	昭和58年	日本海中部地震（震度5）
1991年	平成3年	台風19号の強風による被害
2011年	平成23年	東日本大震災（震度4）

(前ページより)
え、院内の診断困難例の共有やレジデントや研修医、医学生向けの症例解説、カンサードボードや学会発表の予行、県内各施設からの症例提示の場として毎朝活発な議論が行われています。参加施設も増え、最近では函館五稜郭病院、秋田大学附属病院も参加しています。コロナ禍を契機に、十和田市立中央病院やむつ総合病院の研修医を対象としたオンライン勉強会を隔月で開催し、高い出席率と好評を得ています。本年度は十和田市立中央病院から二名が入局しました。本年度はつがる総合病院でもオンライン勉強会を開始予定です。掛田教授の就任以来、入局者も充実し、毎年の専門医取得も順調に進んでいます。医局員が増えたことで、県立中央病院や八戸市立市民病院、弘前総合医療センターへのレジデント派遣を進めています。本年四月には、長年放射線診断医が不在だったむつ総合病院にIVR対応可能な専門医が赴任しました。昨年度からはつがる総合病院も遠隔画像診断がスタートしました。更に県内各施設OBとも定期的にオンライン会議を行い、各地域の診療の充実のため基幹病院との連携・連絡を密にしています。研究面では、健康未来イノベーション研究機構の「岩木健康増進プロジェクト健診」に積極的に参加し、若手医師を中心に脳の健康についての説明を進めています。

今後もICT技術や人工知能を積極活用することで院内のみならず、県内各地の画像診断の質向上、安全安心な画像検査、教育や研

第67回 東日本医科学生総合体育大会夏季競技を終えて

評議員(医学科三年) 四戸 希

東日本医科学生総合体育大会、通称東医体は東日本医科学生体育連盟が主催する大会です。各加盟校には参与、理事、評議員があり、本学の参与は福田眞作学長、理事は津田英一教授で、評議員は代々バレー

研究活動の推進に努めてまいります。引き続きご指導ご

ボール部の主務を務めさせていただきます。評議員として六十年以上の歴史ある大会に携われますこと、大変光栄に思います。精一杯努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。



(表) 令和6年度 第67回東日本医科学生総合体育大会夏季競技の主な好成績

柔道部	男子 個人	60kg級	安達秀太郎(2年)	準優勝
ゴルフ部	女子 個人	60kg級	西村 楓香(4年)	4位
ラグビー部	男子			準優勝
剣道部	女子 団体		山内 璃瑚(1年)	ベスト8
	女子 個人			3位
空手道部	女子 総合			準優勝
	女子 団体	組手	田茂 舞子(6年)	準優勝
			中村友紀乃(6年)	準優勝
			藤田 爽佳(6年)	準優勝
水泳部	女子 個人	形	藤田 爽佳(6年)	準優勝
	女子 総合			4位
バレーボール部	女子			ベスト16
サッカー部	男子			ベスト16
卓球部	男子 団体戦			ベスト16
陸上部	男子	800m	須藤 駿(6年)	6位
	男子	400mハードル	峯 正隆(5年)	6位
	男子	4×100mリレー		5位
	男子	4×400mリレー		7位
	男子	トラック		8位
	女子	400mハードル	竹原 凜(5年)	4位
	女子	1500m	平山 茜(4年)	優勝
	女子	3000m	平山 茜(4年)	優勝
	女子	走り幅跳び	藤原 幸羽(2年)	4位
	女子	円盤投げ	佐藤 佑奈(5年)	準優勝
	女子		村上 桃子(4年)	3位
	女子	砲丸投げ	佐藤 佑奈(5年)	優勝
	女子		村上 桃子(4年)	3位
	女子	やり投げ	村上 桃子(4年)	6位
女子 総合			優勝	
女子	トラック		8位	
女子	フィールド		優勝	

令和6年度の第六十七回東日本医科学生総合体育大会夏季競技は、コロナ禍が明けてからの二度目の開催となり、獨協医科大学の代表主管で八月に行われました。本学の夏季競技終了時点の総合成績は全参加校三十七校のうち第十二位、女子部門においては第四位と健闘し、多くの部活動で優秀な成績を収めることができました。本学の主な成績を表に示しましたので、ご覧ください。なお、冬季競技

のスキーは三月二日〜三月九日に田沢湖スキー場で開催されます。東医体出場にあたり、今年度も多くの方々からお力添えをいただきました。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。今後も各部門とも文武両道の精神で、学業に勤しみ、東医体冬季競技に向けて、また来年度の夏季競技に向けて練習に励んでまいります。引き続きご声援のほどよろしくお願いたします。

柔道部主将(医学科四年) 工藤 壮太

二〇二四年八月に仙台で行われた第六十七回東医体に、医学科二年の安達秀太郎が出場し、男子個人60kg級で準優勝致しました。三回戦で足首を負傷し、試合続行が危ぶまれましたが、不屈の精神で決勝まで勝ち上がる事ができました。

た。決勝では惜しくも筑波大の学生に敗れましたが、稽古の成果と彼の持ち味であるスタミナを存分に発揮し、試合内容は素晴らしいものでした。昨年に引き続き、部員が東医体で入賞できたことを嬉しく思います。また、試

合後は他大学の学生との交流を深めることもでき、大変有意義な大会となりました。今回の東医体には部員一名の参加でしたが、現在医学部柔道部は部員三名で活動しております。医学部柔道部は昔から少数精鋭で、個々の力が強いのが特徴です。現在部員数は少ないですが、部員の仲は親密です。OBの先生方との繋がりも深く、いつも手厚いバックアップをいただいています。柔道競技の団体戦は五人制です。昨年度は部員五名で東医体の団体戦に出場し、三位に入賞することができました。現在の三名でも団体戦出場の条件は満たしています。フルメンバーで東医体の団体戦に出場したいと部員一同願っています。柔道経験者・興味がある方、いつでも入部を受け付けております。マネー

こんには、弘前大学医学部卓球部主将の藤原敬継です。我々医学部卓球部は、日々の練習や大会を通じて卓球技術を研鑽し、部内外との交流を深めています。部員は六十名で、医学科と保健学科のメンバーが皆、卓球を通じて心身ともに日々成長しています。さて、卓球部というと、内情は文化部とか、形だけの運動部だとか、そういった見方をする人も多いのではないのでしょうか。卓球はイメージとして、単純でこぢんまりとしていますし、それゆえ裾野が広いというのには魅力の一つだと思います。しかしひとたび卓球に熱が入れば、見える景色は一変します！コンパクトでダイナミックなスピード感に！ 274×52.5cmの広大さに！そして一瞬の閃きの連続に！ そんな素敵なスポーツ、卓球の練習は週二回(火、金)、保健体育館の一階で

行っています。それ以外の曜日も、放課後や休日には自主的に集まって練習する姿がよく見られます。時間のあるとき、卓球熱が冷めないうちにすぐ練習できることが強みの一つです。そういった環境から多くの強い選手を育んだ、歴史ある部活であると知られていきます。屋内競技ですので、練習も大会も季節を問いません。兼部している人の中には、ほかの部活のオフシーズンにのみ集中して参加する者も見られます。競技のほかに、イベントも盛りだくさんです。お花見に遠足、BBQや他大学との交流も。大学生に必要なものはすべて卓球部で手に入りますよ。時間も、経験も、つながりも！現在我が部は、未経験者が半数を占めています。道具も貸し出せるものが多いので、ぜひお気軽にいらしてください。我々と一緒に卓球熱で燃えましょう！

部活動紹介

卓球部

医学科三年 藤原 敬継



競技スキー部

医学科三年 坂田 稜介

医学部競技スキー部は昭和三十九年に設立され、今年で六十周年を迎えました。部員は医学科三十五名、保健学科八名の計四十三名が所属しています。顧問は歯科口腔外科学講座教授の小林亘先生です。アルペンスキー部門・クロスカントリ部門ともに北医体や東医体で上位をとることを目指してトレーニングに励んでいます。

昨年度は暖冬の影響で雪が少なく、特にシーズンはじめは思うように練習することができませんでした。それでも、部員一人ひとりができることを最大に尽くして北医体・東医体で力を発揮することができました。

練習は全学の競技スキー部と合同で行っています。夏のシーズンオフでは陸上トレーニングやローラースキー練習など、シーズンに向けたトレーニングを行います。冬のシーズン中は、休日は日中練習、平日は放課後に近くのスキー場でナイター練習を行なっています。このように冬は毎日スキーができるという素晴らしい環境に恵まれています。ほとんどの部員が競技スキー初心者から始まりますが、先輩やコーチの指導のもと技術を向上させることができます。大会では部員全員が選手として出場することができ、一年生から大会に参加できることも大きな魅力です。

競技スキー部ではたくさんのイベントが行われます。新歓ドライブや、秋田大学との合同行事のお花見や花火大会、岩木山登山、秋レクなど、イベントが充実していることで冬以外も学生生活を楽しむことができます。ここ数年では医学、全学ともにたくさんの部員が入ってくれたので、いろいろな先輩に出会うことができます。私たちと一緒に雪国を楽しみたい新入生はぜひ見学にお越しください。



最後にになりますが、私たちの活動をご支援してくださっているOB、OGの先生方に深く感謝申し上げます。この地で存分にスキーを楽しむことができていることへの感謝を忘れずに部員一同、部活動に取り組みます。今後とも応援よろしくお願いします。

人事異動 (R6.9.1 ~ R6.11.30)

●医学研究科所属

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.10.1	整形外科科学講座	助教	太田 聖也	八戸市立市民病院
R6.10.1	整形外科科学講座	助教	亀井 敬太	弘前総合医療センター
R6.10.1	地域救急医療学講座	助教	小山 一茂	青森県立中央病院
R6.10.1	附属健康未来イノベーションセンター	特任助教	田中 直	八戸市立市民病院
R6.10.1	救急災害・総合診療医学	助手	市川 詩乃	麻酔科 病院助手
R6.11.1	麻酔科学講座	助手	石山 絵里奈	麻酔科 病院助手
R6.11.1	総合地域医療推進学講座	助手	木下 翔平	脳神経外科 病院助手

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.10.1	保健学研究科	准教授	古川 智範	附属バイオメディカルリサーチセンター(脳神経生理学) 助教

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.11.1	附属地域基盤型医療人材育成センター(医学教育学)	准教授	浅野 研一郎	脳神経外科 准教授

【任期満了退職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.10.31	ウォーターヘルスサイエンス講座	助教	石田 水里	健康未来イノベーション研究機構 特任助教

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.9.30	皮膚科学講座	准教授	松崎 康司	まつざき皮膚科
R6.9.30	大館・北秋田地域医療推進学講座	准教授	坂本 義之	弘前総合医療センター
R6.9.30	整形外科科学講座	助教	一戸 雅之	八戸市立市民病院
R6.9.30	眼科学講座	助教	山内 宏大	たかはし眼科
R6.9.30	地域救急医療学講座	助教	對馬 誉大	弘前総合医療センター
R6.9.30	病理生命科学講座	助手	小笠原 健太	消化器外科 病院助手
R6.9.30	整形外科科学講座	助手	油川 広太郎	八戸市立市民病院
R6.9.30	救急災害・総合診療医学講座	助手	齋藤 くるみ	麻酔科 病院助手
R6.9.30	女性の健康推進学講座	助手	三上 智香	大館市立総合病院
R6.10.31	統合機能生理学講座	准教授	木下 正治	京都大学

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.11.1	呼吸器内科、感染症科	助教	石岡 佳子	呼吸器内科、感染症科 助手
R6.11.1	リハビリテーション科	助教	藤田 彩香	リハビリテーション科 助手

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.9.1	放射線診断科	助教	藤田 環	弘前総合医療センター
R6.10.1	整形外科	講師	木村 由佳	健生病院
R6.10.1	泌尿器科	講師	村澤 洋美	鷹揚郷腎研究所 弘前病院
R6.10.1	泌尿器科	講師	佐藤 天童	つがる総合病院
R6.10.1	内分泌内科、糖尿病代謝内科	助教	達増 みずぎ	黒石市国民健康保険 黒石病院
R6.10.1	消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科	助教	須藤 亜希子	弘前総合医療センター
R6.10.1	整形外科	助教	石橋 恭太	青森労災病院
R6.10.1	麻酔科	助教	平井 直樹	むつ総合病院
R6.10.1	脳神経外科	助教	片山 耕輔	黒石病院
R6.10.1	検査部	助教	土屋 純一郎	青森県立中央病院
R6.10.1	高度救命救急センター	助教	今 智矢	八戸市立市民病院

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R6.10.1	集中治療部	助教	野口 智子	麻酔科学講座 助教

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R6.8.31	泌尿器科	講師	相馬 理	弘前総合医療センター
R6.8.31	放射線診断科	助教	飯田 沙野	東京ベイ先端医療・幕張クリニック
R6.9.30	内分泌内科、糖尿病代謝内科	助教	浅利 ゆう子	黒石市国民健康保険 黒石病院
R6.9.30	整形外科	助教	藤田 有紀	弘前総合医療センター
R6.9.30	麻酔科	助教	内田 達士	むつ総合病院
R6.9.30	高度救命救急センター	助教	中山 弘文	三沢市立三沢病院
R6.9.30	集中治療部	助教	大山 翼	つがる総合病院
R6.9.30	産科婦人科	助手	黒瀧 紗希	産科婦人科 病院助手
R6.9.30	脳神経外科	助手	上野 浩太	青森市民病院
R6.9.30	高度救命救急センター	助手	佐々木 嵩洋	高度救命救急センター 病院助手
R6.11.30	高度救命救急センター	助教	白鳥 俊博	国立病院機構 青森病院

臨床教授・臨床准教授新規称号付与者

称号名	氏 名	現 職 名	称号付与期間	推薦講座
臨床教授	富田 卓	青森県立中央病院 整形外科部長	2024年10月1日～2027年9月30日	整形外科科学講座
臨床准教授	油川 修一	青森労災病院 整形外科部長	2024年10月1日～2027年9月30日	整形外科科学講座
臨床准教授	入江 伴幸	三戸中央病院 副院長	2024年10月1日～2027年9月30日	整形外科科学講座

お悔やみ

弘前大学名誉教授(元附属病院院長)元内科学第一講座教授 棟方昭博氏には、令和六年九月七日に逝去されました。行年八十三歳。ここに、謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。

医学部ウォーカー第百十一号をお届けしました。ご寄稿いただきました沢山の先生方、学生の皆さんに心から感謝申し上げます。今回も多くの受賞報告や国際交流の報告があり、本学の発展の基盤となる人材育成が進んでいると嬉しく思います。さて十一月に入り、気温も急に寒くなり、雪がチラチラと舞う季節になりました。政界では自民党が議席を減らし、米大統領に返り咲き、世界がどう変化していくか気になる場所ですが、我々にとっては、今年の雪の量が最も気になる場所です。最近の温暖化で少ない傾向が続いています。予報によると今年が、予報によると今年がラニーニャ現象の影響で、平年並みの寒さや多い降雪が報じられております。朝のひと仕事は運動不足解消にはよいかもしれませんが、足腰を痛めないようご留意ください。次号も沢山の寄稿をお待ちしております。どうぞよろしくお祈り致します。



編集後記